

ミオヤの光

大靈の光の卷

大靈の光の緒言

緒言	一	無礙光	三二
序説	一一	無對光	三六
宗教の三階	二	炎王光	三八
宗教の意義	四	清淨光	四〇
宗の三議	五	歡喜光	四一
如來の三身	一	不知慧光	四三
宇宙の二界	一六	不斷光	四五
信仰の心理	二〇	難思光	四八
信仰の三心	二二	無稱光	五〇
本説	二七	超日月光	五二
無量光	二八	付録。弁榮聖者略傳	五五
無邊光	三〇		



九蒼の無窮なる之を仰げば彌高遠に之を觀すれば益々深に日月星辰は其軌を逸せずして循環し地には四時行はれ百物生ず其秩序の能整へる法則の能く行はる造化の妙用得て測るべからず然るに世の物質に偏せる學者は曰く宇宙萬物は物質の原子か自然則に依て構造せられ器械的に運轉するに過ぎずと或學者は之を辨じて任假や器械としても例へば世の凡ての器械なる物は非凡の天才と巧妙なる工家の手に依て造られたるにあらずや然れば即ち宇宙を構成する造化の全知全能者に對しては神として吾人は畏敬信服の外なしと尙進んで佛教にては天地萬物に細大となく有ゆる法を統る靈體に無盡の性徳が具備りて而して开を法則を以て萬物を生成す故に其靈體を法身如來藏性と仰ひて居る 同じ物を學語に質體亦是眞如等と名づけ宗教語に遠化の神又は如來法身等と呼ぶに外ならず 法身は萬物の能生なれば父の如く又一切を養成する 母とも見へる 吾人は吾等衆生の本源絶對の大靈を號ぶに大ミオヤとして仰ぐ 然り而して吾人の如き形を見れば一感星の寄生物に過ぬ身なれ共大靈の子たる靈性具するあり之を開けば大靈と合し親子親密に合意するを得らる 大靈は萬有を攝するに一大靈光を以てす

光とは大靈より萬物に及ばず法則なり勢力なり 一方には天地萬物の法則となり 一面には衆生の靈性を開發靈化するの妙法たり

教祖釋尊六年修行の終 無明の眠覺め正覺を得たるは大靈無量光と合して空間に偏し十方を照し無量壽に歸して時間に徹し永恒不滅なる涅槃を證り玉へ 然して佛陀は生涯衆生に救ゆるに正覺の無量光と涅槃無量壽の眞理を以てす 吾人は世の清き同胞に告ぐ吾等は 幸に大靈の特寵たる人身を受く 願くば諸賢と共に大靈の光明を得て光明の生活に入らん 然れ共是人生の大事至誠にあらずは得難し

明治天皇には 眼に見へぬ神の心に通ふるは人の心の誠なりけりと示され給ふ至誠至

眞にして能く神に通ず。願くは至誠心を以て靈光を獲得し世の爲め國の爲に竭し現世を通じて永遠の光明に入ることを望む是れ此に冊子を物して吾同胞に勸むる所以なり
佛陀禪那しるす

大靈の光序説

安心と起行

人生の大事たる自己の宗教心を立んには先づ安心と起行とを定むべし、目的定まらずして何れに行かん歩を運ばずして争でか目的の地に達せん是れ信仰の安心起行を定むべき所以である此に就て三條あり、一に所求の目的二に所歸の本尊三に所修る行法

初に所求の目的とは何の要求なしに信仰の發る筈なく亦目的なしに行ことは能きぬ然して其信仰の目的が意識の幼稚なると高等なるとは相同からず幼稚なる人の信仰は病氣平癒又は厄難の除けるが爲と云様な凡て形の幸福を目的として居る、次に進んでは現世の幸福を求るは本意でない未來の上天安樂を欣求むる爲に信仰する、尙進ん

では精神的に罪惡我は清られ闇黒の生活を轉じて光明の生活に入り現在通して永遠の生命に入ることを目的にす此の如く意識の程度丈に要永をなして居る

二、所歸の本尊、自分の要求は自己の力の及ばざる所であれば或は大威力ある神又は大慈悲なる佛に歸命信賴して此靈格の外に全く我を救ひ下さる御方はない故絶對的に依頼べき本尊を定むべきにある

三、所修の所法、何なる行法を用ひば神意に叶ひて我が罪は消て救はるゝであらう或は沐浴齋戒斷食苦行に依て罪を清め神の威力を受くる物とし又は佛の恩寵に叶ふべき信心を以て救はるものとす又は冥想觀念にて神人合一して我が要求は満足を得らるゝものとす。

斯三條が確定したるを安心起行の立たる信仰とは云ふ

宗教の三階

佛教には機教相應と申ことは宗教は時代により又機類に由て知識の程度同じくない故随つて其宗教も階級がある昔より今に至る迄の發達の行程を暫く三階に分ては、

第一期は自然教、第二期は超自然教、第三期は圓具教とす。

初め自然教は幼稚なる宗教思想にて神を自然の中に認め日月星宿を神とし高山深池に靈ありと思ふて之を畏敬し信賴し病氣を癒し災難を除き得るものとし凡て肉の幸福を目的とする信仰である

二超自然教、神は現世界を超たる高遠なる天上に在し自然界は神に造られた物にて人類の祖先が神に背き侵したる罪は其子孫に及ぼし人間は定まつて墮獄すべき罪を有て居る然其神の戒律を守りたる物は義として救はる死後は天國に生ずとは猶太教の教へにて或は現世界は罪惡衆生の業より成て居る國土なれば衆苦充滿い此を厭ひて佛の所感なる淨土を欣求し其佛力を仰て歸命信賴する時は未來は其淨土に生ずと斯等は現世界を超たる天上又は彼岸に於て死後の福祉を宗とす故に超然教とす

三四具教、前の二教を合て更に高等に進たる宗教である第一期は肉の幸福を宗とし二期は肉體を離れたる未來教に第三期は精神主義現在を通じて永遠の生命を求む是れ吾人の理想とする宗教である新教は宇宙全體が通じて絶體の大靈にて此に二面あり一方は自然界一面は心靈界、自然界も大靈の天則に依て行はれ吾人は大靈より受たる靈性と世界より受たる煩惱とを有て居る、然して靈界より出たる教主佛陀の教へに隨て吾人が罪惡我を自覺り大靈の現はれたる如來を信賴する時は其光明に依て清き我と生れ更り光明の生活に入り己が天分を全ふし、而して彌々此の終には永遠の心靈無量壽界に歸ることを得ると斯の三階の宗教は隨類應機の然らしむる處

宗教の意義

宗教的關係として宗教は神と人即ち大靈と小靈との合一する處に成り立つ故に生佛一致神人合一の語を以て宗教の定義として居る即ち如來心と衆生心との合意することにて人が小宇宙小我とすれば如來は大宇宙大我である、小我は子にて大我は親である大我より小我に對するを恩寵にて其恩寵を仰ぐのが信仰である經に其因縁を喻を以て譬は日光あり眼ありて能く物を見るが如く佛日の光明は信心の眼ありて感合することとが得らると斯兩者の親密なる關係が即ち宗教の意義である

宗の三義

佛教に古來三義を以て宗と云ふことを解して居る三義とは、獨尊、統攝、歸趣として宇宙には萬物の根本と中心と終局とが有と云ふことである獨尊とは宗教心より見れば宇宙に萬物に超絶せる唯一獨尊の存在を信認し、之を歸依信賴す、其尊體は二面に觀しらるゝ、一方には君の如く天則の主權者として萬法を攝理し玉ふものと見へ、一面には親の如く恩寵を以て萬物を寵愛し撫育せらるゝものと想はる

大靈が宇宙の中心とし天命の源、神聖なる權威者として萬有に君臨し玉ふこと、人

爲則の中心たる主權者の如く天則の大威神者にてあれば之に歸命信賴するか即ち信仰である、畏くも 明治天皇には、罪あらば我を咎めよ天つ神民は我身の生みし子なれば、亦、眼に見へぬ神の心に通ふるは人の心の誠なりけりと御製は天の神聖に對しては畏敬信順すべきことを御示に成らせ玉ふものと信じらる、亦孔子か天道を恐れざる族には道德の施しようないと歎せられた、天何をか言はん四時行はれ百物生ず亦罪を天に獲る時は禱る處なしと此等は孔夫子か天道に對する信仰の一端と察しらるソクラテース等も道德は悉く神を信する心から割出して居らる

吾教祖釋尊が獨尊の説は大乗教中に散在す中に就て最とも簡明なるは無量壽經に、無量壽如來の威神光明最尊第一にして諸佛の光明及ぶこと能はざる所なりと、佛教は汎神教なれば無量の神を立つ、然れども之が中心統一の如來を立て獨尊とす、吾人は釋尊の教に依り無量光にして無量壽なる如來を以て一切諸佛萬法の獨尊統攝歸趣と信す

親としての獨尊、萬物は産出された子にて大靈は其大親である、唐の宗密禪師が天人の根本を原はめて原人論を造られた其大意に云く儒教道教では人間の根本は近くは其父其祖なので遠くは天地陰陽一大元氣が萬物の大親であると开は人間の源を形氣の方から原めたので佛教では人間の本をば心の方から究めて段々其本の本は宇宙一大精神とも云べき如來藏心が根本として居る然て人には形氣と精神とは離る可からざる關係を持って居るから儒教に云ふ一大元氣と佛教の一大精神とは實は一體を兩面から觀たのである、夫を宗教的に觀れば物心不二の絶對大靈ビルシヤナなる大ミオヤである、法華には三界は我有其中の衆生は皆吾子と示されしも如來は一切衆生の大ミオヤと云ふにあり而して親が子に對する目的は愛育して親の意と合し親の計に歸せしむるにあり由て宇宙唯一なる尊體を本尊とし之神聖なる光明の下に仕へ奉つる意が宗教心である、若し唯肉我を尊大にし而して肉慾や名譽財産等のみ尊びて其等の奴隸となる物は無宗教者と云ふべきである

統攝 大靈は天則の理法を以て萬物を統て攝理すると云ふこと、天地萬物は一として天則に順はぬ物はない天體の有ゆる星宿も秩序亂さず一定の軌道に運行し地上に行はるゝ萬物の大小となく悉く妙法に軌持せられて居る、吾人が眼に視耳に聽く生理火は暖かに水は潤ふ物理感覺し認識する心理等悉く天則の條理が定である花の紅柳の緑法の法位に住して萬代に易らぬ是れ大靈が萬物に及ぼす法則であるロゴスである

又大靈が萬物を統攝するに小は大に統られ下は其上に攝めらるゝ理法がある吾人の一毫は數多の細胞を聚めて統制自治體を爲して居其上の指に統制せられ指等はまた手に統制せられ吾人が四支五官五臟六腑は各自一の統制自治體を爲し居れ共一の身體に統制せられ幾干の個人を集めて一家に統られ家家は一村落に統られ其上に縣制あり國家ありて統制自治體を爲す數多の國は地球に統られ幾多の遊星は太陽系に統一られ、無數の太陽系は宇宙全一なる大靈に統攝せらる大靈は終局の統一者とす、大靈が天則を以て又因果の理法を以て萬物を統攝し吾人を生存せしむ、然れば即ち吾人は天則に則り自己を攝めねばならぬ理性ある、吾人は全一を縮圖したる小宇宙小國家である大宇宙が天則に順がつて天地に行はる如く國家の政が法則に依て統制らる如く小宇宙小國家なる吾人の個體も法則に順つて統攝ねばならぬ、國に法則なく政治なくは白晝兇賊横行するも之を制すること無きが如く自己心中に傲慢貪戾憤怒邪偽等の賊が暴行を働くも敢て之を制裁することなきは即ち無宗教者である若し大靈の法則に則りて自己を統制し攝理するは宗教心を有て居るものとす

歸趣、大靈が萬物の親として一切を養ひ終局に歸一せしむるの義、人か大靈の勢力に隨つて進む時は其本へ歸ることを得、例へば天の運行が地球は太陽を中心とし公轉一周すれば還た本の位置に歸る、因果の働きが米の種か一年成長の後は其親と同じ米の果となる矢張親と同じに歸るので人の小兒が成長の曉は亦人の親となり同じ位置に歸る、是大靈が萬物に行爲の結果あらしむ勢力である、然して根本にも本の本あ

る如く、終局にも又段々あり人の子が親となれば歸趣に達したのである故或程度に至れば發達も止む、人は人の子であると共大靈の子である故に吾人は大靈に歸一せざれば止まぬ理性を持って居る、衆生が大靈の根本より發現し亦終局に大靈に歸一すべき迄の大概を演て見ん、先づ絶對の大靈より發現したる太陽太陽より分れたる地球地球上に發生したる極小の生物其生物にも大靈より受た性能が伏藏して外界のゆるす限りは發達す萬物相互に競ひ共に相資けて進化す竟に高等動物より進みて人類となり、本同根より出た生物なれ共正常に進みたるは撰まれて人間となり而してまた同じ人類たるも正常に向上したるは文明となり其中に於てまた正常なるは大靈より受たる靈性を開發して終局の大靈に歸へり靈的生命とし永遠不滅の無量壽に歸着し得るは正中の正たる物である大靈の光に木つき終局の歸趣を定めて向上する者は宗教者と云ひ唯肉の生命のみを目的と想ふ物は卑野なる生活である

如來の三身

宇宙全體が絶對大靈永遠に活ける如來である然るに衆生の爲に働の上に三身に分れて居る三身とは、法身、報身、應身、とである、法身は如來の本體にて學語に宇宙の實體又は眞如等と云ふことである哲學の唯物論者は宇宙は現象には有形の物質と無形の精神との二つあるも其實體は唯物質の原子が自然法に依て萬物を構造したのである故に物質が本體であると、又一方には宇宙の精神と物質との統一的存在は心眞如にて其勢力が變現した萬物であるから實體は心である然し此兩者は宇宙の本質は心と物質とが主張するだけ共開は絶對の大靈を物質と精神との兩面より觀たに過ぎぬ而して何れも冷靜なる思索から見居る若し靈活なる宗教心より見れば地水火風空大の物質本質と識大なる心的元素との統一的存在絶對の大靈は永遠大生命の毘盧舍那如來てふ靈活佛である、一切萬法の原則の故に法身と云ひ亦自己に無盡の性徳を包藏して

萬物を産出す故に如來藏性と名づく、一大法身中の萬物は悉く其分子で有から皆小身法身である太陽も地球も及び地上の動植物に至る迄皆小法身と云へる又大法身が大造物の故に小法身も又小造物者である各生殖の作用あるを以て知るべし衆生は小造化ると共に靈性を伏藏して居る故に進化の或程度に到れば靈性開發し聖者と成り得らる然れ共靈性の心地は人々具有するも聖種を播して之が養ひを受ざれば無量光にして無量壽なる大果報を收獲ことは得ぬ、此に於て之を可能にする報身如來を仰がざるを得ぬ

報身如來 法身は萬法の根本にて吾人は其分子であるとは已に明しぬ、此よりは報身佛が衆生の信念に報ひて有終の美あらしむ靈力なるの義を演ん、報身は心靈界の太陽とし、また、終局目的の光として萬有に照臨し玉ふ靈態である、例へば自然界に太陽なかりせば萬物を養成することなき如く、報身の大日輪が靈的光明を以て衆生の信念に報ひて靈化せざれば終局目的なる靈格と成ること能きぬ

報身は信仰の主體に對して斯様な報ひを與ひ玉ふ靈力である吾人は法身より受た心地が我儘に生ひ繁る煩惱の雜草の爲に荒蕪て居る、此煩惱我は終に好果を得ることはない、されば人間界に釋迦佛陀が出て教ゆるに大靈の粹なる無量光如來に歸命信賴むべき法を以てす、無量光如來の眞理を會得し之を信仰の聖種として常に念する時は靈界の大日輪に常恒に照護さるゝ恩寵を感じられ、然して機已に熟する時は心靈の花開き無量光と合ふて十方に照照し無量壽の涅槃に歸入すること能き大果報が得らる報身は人の信念に報ひて實感せらるゝ靈態なれば、信仰なき人には感じ得られぬ、例へば太陽に依て此肉の生命が生活し得らるるに無量光に依て靈の生命は保存せらる大靈に體あれば必ず用あり法身は先にして報身は後に有りと云ふべからず故に報身無量光は永恒に十方を照し衆生を靈界に攝取し玉ふ然れ共此地上の衆生には知るに由ない、然て大ミオヤの慈悲迷没の迷子を慰れみ、釋迦已前には往昔法藏菩薩の身を受て一切衆生をして常往の平和なる涅槃の光明界に入るべき道を發見せんが爲に無

量の苦難を嘗て竟に衆生大安の眞理を發見なされた、謂く諸佛の終局は無上正覺を得大涅槃を證するにあり、正覺は無明の眠醒て正しく大眞理を覺ることにて便ち横十方を照す心の無量光である大涅槃とは生死を離れて常恒不滅の生命となりて如來無量壽に歸一した態である、故に諸佛は無光量の正覺を取り無量壽の涅槃を得るを目的とす然るに正覺を得涅槃を證すとは凡夫は容易ならぬことと思ふをこそ安らかに正覺の無量光如來を信する時は光明に攝化せられて光の生活に入り涅槃無量壽の中に安住することが得らると教ゆる時は同じことなれども衆生に入り易しと、爾しより衆生を導くに無量光にして無量壽なる如來を信念して本覺の御親の許に歸入れる徑路を開きなされた

近くは教祖釋尊が菩提樹下に無上道を得なされば正覺の眼を以て見れば蓮花藏世界に相好圓滿の麗はしき如來が法身大菩薩の爲に說法するを觀す其時に形を見れば悉多王子が道士の姿で樹下に黙坐して居るなれ共釋尊の精神は報身如來無量光にてありし故に釋尊は正覺の大精神は報身一體にて形は應身である起信論には報身佛は菩薩の業識を以て見ゆる如來の御姿にて身に無量の相好ありて麗はしきこと極りなく無量莊嚴の美天界に在ますと而して菩薩の心が進めば隨つて所觀の佛身も益々廣大に見へ進みたる終局は此方の心も法界に周徧し彼方も宇宙に徧滿して彼此の相が亡した時が菩薩が佛と成りしのであると、報身無量光は常恒に法界を照し衆生を攝取同化し玉ふ靈力は徧在すれ共衆生は心の闇深くして之を知ること能はず爰に於て報身より分身して此世界に人佛を出し玉ふ之を應身とす。

應身 無量光より身を分て現世界の衆生に相應せる人の身を以て教化を施し玉ふ故に應身と云ふ即ち教祖釋迦世尊である佛陀が此地上に出玉ふや中天竺カピラの淨飯王を父とし摩耶夫人を母とし幼名をシタルタと呼び生れつき教智五明四吠陀に精通し伎藝として習ふに成らざるなし老病死の相を見て世の無常を悟り國と位を捨て山に入て道を修し艱苦すること六年竟に摩訶陀國の伽耶のヒハラ樹の下金剛座に坐し禪那三昧

に入て一夜天魔の碍を降伏し臘月八日東の空に明星輝き出る時無明の夢醒て朗らかに正覺を成し罪惡の源を解脱し無量光と合一す、佛陀は正覺の曉より鶴林の夕に至る迄涅槃即ち無量壽に歸一べき真理を教ゆ、涅槃とは無明生死の夢醒て真如の光顯はれ常樂無量壽の都である、佛陀には八十にてクシナの鶴林に於て別を告も神は無量壽涅槃の本土に歸り玉ふ。

宇宙界

斯く説來る三身は本一體の三面にて佛教各宗の中密家では法身を大日と呼て本尊とす淨教は報身を阿彌陀と唱へて本尊にす法華は應身釋迦を表として居る、吾人は此三身は本來一體の三面にして不可離の關係を以て居れば通して大ミオヤとして仰て居る

宇宙大靈は本來絶對なれ共吾人が肉眼に見ゆる方と心眼に觀しらる方との二面に分つ、甲を自然界と云ひ乙を心靈界と呼ぶ、此二界を基督教には地上と天國と分ち佛教には娑婆と寂光亦は穢土と淨土現界と密嚴又は生死界と涅槃界と種々の名を以て表されて居る、自然界は凡夫の感る所心靈界は聖人の安住する方自然界は吾人の經驗しある方にて日月は運行し地に生物生存し自然の法に依て規定せられ因縁相依て生し因果に相續し生存の競争は強者は弱を伏し生者は必ず滅し成物は定て壞る老病死苦は尊卑を選まず、然るに天性の人は唯此世界を快樂の舞臺と想ひ朝の紅顏夕に白骨と化するを悟らず唯肉の幸福と利己主義を以て目的として居る云何せん欲樂は貪ばれば貪ばるほど不足を感じ憂惱を増す、されば自然は彼等が欲望を満足させぬ

若し現世界は唯肉の幸福をのみ目的としないで、より高等なる心靈上に無量の光と無量の壽に入るべき修行の道場と想へば人生大なる意義の存することを覺らむ、噲は鐵垢中より純金を練り出す如く罪惡の奥より靈我を發揮すべき自己と存すれば自然と人爲の迫害も却て精練の器と想ひ何なる困苦も敢て苦とするに足らず光陰と精力との濫費せざるにつとめ一口の生命は永遠を發見するの貴きを覺るに至る、殊に人類は

一切の生物界より選ばれて進化したる正當の生命なるに於てをや是非とも無量壽に入るの道を發悟せざるべからずである。

心靈界 心眼開きて觀ゆる方面にて是宗教の目的とする涅槃無量壽の靈界である佛陀にて淨土と名づけ自然界に超勝したる靈妙の境界超然教なる猶太教の天國觀は蒼天の上に微妙なる天國ありと開は死後に往生する處と教ゆ然して基督教の神國は神の在ます處にあり神在さる處なきが故に天國は一切處に徧在す故に人が聖靈に清めらる時は神と共に在ることを得、佛教にも釋尊已前の淨土觀は須摩提を西方の遠きに立つ是れ印度古代の傳説なので釋尊自ら發見なされた極樂は無明生死の夢醒て正覺の曉に顯はれたる光明常に輝く涅槃界のことである故に釋尊は其徒に教ゆるに常住の涅槃に入るを目的とす、然して全く修行已に成就して心靈界を發見し、そこに神を安住するを有餘涅槃とす心は極樂無爲に住して身は自然の約束を持て居る而して此命終る時は全く涅槃常樂に歸るを無餘涅槃とす、又釋尊は極樂の在處を兩説に教て居る、天性の人には從來の傳説を用びて須摩提は入日の彼岸に在るとし、靈性開きし人には去此不遠にて佛眼を以て見れば處として佛界ならざるはなしと又自然界は凡夫の業識の感する處其生物が必ずしも同一に感じて居らぬ同じ室に在りても人間と蠅とはいかゝ蠅には人の珍重する美術などに對しても何の感じもない彼らが低度の心では迎も人間のすべてを解することはできぬ唯識論に一水四見の例あり一つ水を人間と魚類と餓鬼と天人とでは皆別々に感じて居ると云ふこと、夫と同じく佛陀が靈妙なる妙莊嚴の淨土と見て居る處に於て凡夫は唯娑婆とのみ見て居る、釋尊は五眼具さに備はりてあれば肉眼では吾人と同じく娑婆を見佛眼では清淨莊嚴の淨界を觀してまします、世に淨土の存在を疑ふ者は己が生死の夢に見ゆる物を實物と謂ふて夢の醒たる聖人の佛眼で觀ゆる方は己に見へぬから無い物と想ふて居る、靈性覺めて見よ妙靈界は現前する、プラトー曰はすや凡夫の畫とする所は聖人の畫とする處は凡夫の夜るなり、凡夫は聖人から見れば價値のない生死界を實物と想ふて靈妙の方は一向に分らぬ

世の人よ諸彦が精神の深奥に伏して居る靈性を發揮し而してまた煩惱を靈化して見よ娑婆は變じて淨土となり生死は轉て涅槃常樂と化する故に

信仰の心理

宗教は客體なる大靈の恩寵と主體なる人の信仰とにて成立つとし然して客體の體用は已に略して明しぬ此よりは人の信仰の方面を述べる人には大靈より受けた靈性と又動物性との兩生を併有して居る、又人と動物共通性と人類特殊性とを有て居るのを佛敎では人の精神を四位に區別して居る即ち肉團と緣慮と集起と眞實心とである此と相似より居る西洋の相學に謂ふ處の頭腦三階説は精神の區別が判り易いから暫らく借て便利上説明せんされど此の區別は唯一往用ゆるのみ、三階とは天性と理性と靈性にて眼より下を天性と云ひ眼耳鼻舌の感覺の働きである并は人類も動物も共通であるのみならず還て彼らか開處を視遠きを聴嗅覺の敏こと口の達者なる迪も人間の及ばざる所である眼より額に至るを理性と爲、此は人間特獨の働きにて百般の事理を辨別し理解し認識し判斷する等の心理作用にて即ち物理生理また道德法律等のすべてを理解しうるは特り人間のみに局る、人は此理性あるから物理を應用し蒸氣電氣等の發明を爲し又すべて世の文明は理性から實現された、次に額より上位を靈性とす、靈性は超然たる靈界の如來と合一し感應し啓示され靈化せらる等の宗教上の心理現象は悉く靈性に於て能くす、正覺の無量光と合一し涅槃の無量壽に歸し得るは此靈性である、理性は宗教上の眞理を理論としては識りうるも實現はできぬ、若し宗教の眞理が理性にて悟り得らる物なれば敎祖釋尊は有ゆる學者を聚めて正覺を得べき筈なるに然らずして超然と入山修道し竟に靈性開發し正覺無限の光をえ涅槃の無量壽を發見なされたのである、然して正覺し來て從來の自己を顧みれば無明の眠に生死の夢を貪つて居たに過ぎぬ然して退て考ふれば世の夢に在る衆生らに覺醒したる眞理を示すも迪も信する

ことは不可能であらんと然れ共進んで觀すれば衆生本靈性を有て居る、故に若し之を開くべき法を教ゆる時は我と同じき無量の光と無量の壽に歸一することが得らる、去來今よりは一切を眼の中より喚び起さんと抑々是れ佛陀世尊が光明の宣傳に起ちなされた所以である

山之見れば人靈性の本能が具つて居らぬ者はない然らば何にして之を開發すべき哉は次に述べん

信仰の三心

如來は心靈界の太陽として智慧と慈悲と靈化の光を以て徧ねく法界を照し信念の衆生を攝化し給ふ、如來の三能の光を被むべき人の知力と感情と意志とに互りて信と愛と欲との三心を以て合一するをうるものとす
聖經に十方衆生よ至心に我を信じ我を愛し我國を欲望し而して我を念せよ然る時は聖きに生れ更ることを得と、如來の心光は徧ねく十方に照臨す斯光に感合せんと欲せば必ず至誠心を以て信じ愛し欲むべきである

信は如來の實在と靈力を承認して疑はぬこと、信に二面あり一に現在我は自ら反照みに實に自分勝手なる動物に選む處なきのみか却て惡知惡意知而して大靈の大なる恩をも顧みず現在の生存も御恩に依ることを思はず能く己を返照する時は全く己が罪惡深重なるを自覺し初めて大なる恩寵を至誠心に仰ぐことになる、二に如來は大御親にして大慈悲に在ませば己が罪惡を悔ひて如來に歸命する時は必ず攝取して下さる又己が靈性は本より如來の子なれば靈の御親に頼る外なしと信じて歸命べきである

信に三位あり、一、仰信、二、解信、三、證信、仰信は天真なる心を以て理窟を排し一心一向に如來を頼めば必ず救はるゝものと信じて一毫も疑はぬこと、解信とは宗教上の眞理を學説に於て能く理解し理性にて信解して疑はざるに至ること、證信とは實修の功果として如來の知見を與へられ如來の相好光明を見等實地の靈感を得て信

すること斯く三位に互り何れにても自から承認して、疑なきに至れば信を得たるものとす

愛、感情の信仰、宗教の中心真髓は感情に有と全く如來を信賴して我物として親密なる關係となり熱誠が血に躍り歡喜が涙に溢れ大靈に戀念して忘るゝ能はざる等の信念は感情である、愛情にも天性の人は唯己が肉と肉の快樂を得らる物のみを愛し或は其が爲に自ら墮落の淵に沈むことさへ覺らざるに至るなり、人の靈性は、大靈の愛的權化の如來を愛慕し靈界の美人に接せんことの戀念は禁すること能はず亦如來は衆生を愛したまふ、慈悲は極りなき相好き靈容と現はれ之に對する愛念は慈悲の面影目前に彷彿たり、衆生より如來に對する愛に三位あり、初めには小兒が慈母を慕ふ如くに如來を欣慕ふ、次に進みては肉の性が好遇者を受戀する如くの感情法華經に一心に佛を見んと欲し其心の戀慕するに由て如來即ち出て爲に說法すと愛の信仰が成熟する時は春日和氣に櫻花爛漫と麗はしきを呈し、復しきを放つ時の如くに神人融合神秘的の感覺不可思議と覺ゆる時に靈胎が娠りこゝに於て信仰の新生命と爲りしのである然る後は我如來に在り如來我に在り精神的に大なる我と一體不可離の關係となるは如來を大なる我として愛するのである

欲、意志の信仰、人は欲望あり志願ありて开が爲に我を忘れ力を竭して働くことが出来る、然して劣等なる人は欲望も卑賤である肉欲や我欲の動機の爲に生活が支配されて居る今宗教は天性我の罪惡と非靈なるを自覺し如來の恩寵を仰ぎて靈き我に成らんと欲する意志なれば高等なる人格と更生するなり

諸若し感情の信仰が花とすれば意志の信仰は果に結ぶのである、大靈を信念し大我の如來を執持して捨てず憶念不斷にして靈的生命の核が成熟する喩は果實類が已に熟する時は其味も又甘きが如く信仰能く純熟する時は妙味益々深きを感じ、又喩は人が其愛する好遇者に對して若し接することを得ば尙進んで其愛する物を我物として之と同柄せんと欲望むが如く若し佛を愛し佛と親しむことを得れば佛と共に在て離るゝ

に忍びず又深く愛する佛と共にせんと欲し佛心を我心とし佛行を我行とし、すべてを同じからんと欲し佛と共に居る佛の在す處は是淨土である故に我も又佛と共に淨土に居る、佛に依て精神生活し佛に依て行爲す又喩は肉の生活に衣食住を要する如く靈的資糧を要す佛より清淨無垢の衣を心に被むれば心して汚すまじと思ふ又佛は我に忍辱の衣を與へ玉へり我は之を着て縦ひ罵詈譏諷や打撻とも安く忍ばる又同情正義慈悲眞操眞實等の諸々の璽珞を以て己を莊嚴せんと欲す又靈の糧なくば靈の生命は保てぬ佛は我らに三味の妙味法悦の美味を與へ玉へり我らは之を享くるが故に身心共に潤はへり又我らは佛と共に如來大光明殿中に安住し種々の莊嚴具さに言べからずまた常に微妙の樂音を聞く又八功德池に遊て神の塵垢を滌く斯の如くの精神生活何に快なるや此生活には靈的活動あり一切治生産業皆實相と相應う佛子佛心佛行即ち光明の行爲である

大靈の光本説

佛陀禪那説

如來光明主義の教義

前説には序説として準備の要義をのべ後説に吾人の主義の教義を明さんとす、宗教的關係の主體客體の合一する處に宗教は成立すとすも之が説明には兩者に分て説かざることを得ぬ暫く三節に分ちて略説せん

一 如來の體用、二 信仰の心理、三 信仰の行儀、實に甚深不思議の眞理は何にして窺がひ知ることを得らる、古徳が至極大乘の意は名の外に體なしと、考ふに甚深の妙理を象徴する名詞は是れ妙體を悟得するの秘鍵である、教祖釋尊無盡不可説の眞理を十二光の名を以て證表なされた、今其名を標せば、無量光無邊光無礙光は如來の體相川の三大にて次に無對光は生佛合一の極度、炎王光は衆生一切の惡質を脱却く力、清淨

光歡喜光智慧光不斷光是人の感覺と感情と智力と意志とを靈化する作用にて難思光無稱光超日月光是行儀分の喚起と開發と體現との三階に對する靈力である

如來の三大

無量光 如來の體大

絶對無限の大靈が世界と衆生に現じるも無量光壽に歸しぬれば 菩提涅槃に證入す

如來の本體は宇宙全體を體として相用との二屬性がある故に體相用の三大となる 宇宙全體が永恒に活ける如來である楞嚴經に宇宙を構造する地水火風空見識の七大元素が法界に徧在して居り其七大の本體は如來藏妙真如性でう一大心靈である、開が業力から一切萬物が發現するので、之を宗教的に物心不二絶對の大靈永遠靈活の生命にてビルシヤナと云ふ、空間に徧して無量光、時間に徹する無量壽である、先にも述べた大法身から變現した世界萬有は悉く其分子であるから、小法身小生命である一 大法身から無量の衆生即ち無量の分類無量の階級粗妙善惡維多の世界と衆生とに成つた、然り而して衆生の中正當に發達したるが人類にて中に就て又正中の正なる物は大ミオヤの靈體に歸着し得らるゝ合格者である、大法身より自然界に産出する時は絶對より相待に無限より有限に無量差別の個體的生命と分れ出た、今度無量光にて無量壽なる如來に歸命して攝取めらるる口には有限より無限に差別より平等に歸趣するのである前にも述べた佛教の終局目的は正覺を證り大涅槃に歸するにあり、如來無量光と合一して心光徧く十方一切の眞理を照して遺すことなきを無上正覺なので、無量壽に歸一して永恒不滅の生命となりしを大涅槃とす、こゝに至て十方一切諸佛は一大彌陀より出で、終局は彌陀無量光にして無量壽に歸するにあり、斯本覺のミオヤに歸ること能はざる者は生死に流轉すべきのである

無邊光 相大

如來無邊の光明は、四大智慧の相にて、遍なく法界照しては、衆生の知見を明すなり

宇宙全體が如來心であれば智慧も透りなく照互りて居るから大と云ふ、心體と心相とは恰虚空と日光とのような物である、四智とは大圓鏡智平等性智妙觀察智成所作智にて、人の觀念と理性と認識と感覺とに例すべきものである

大圓鏡智 宇宙全體に照り互れる處の大智慧が鏡の如くにてあれど、吾人の觀念は自分を本として世界萬物を外界の物として見て居る、若し如來の鏡智と合する時は吾人の觀念が宇宙心と一體となるから、有ゆる天體無際星宿も悉く自己心中の物々と視じらるに至る

平等性智 如來は宇宙の根底を理性として居る即ち本源の自性である、然るに吾人は小我を根底として居るから我と彼とを分別し世界をも外に認て居る、若し如來平等性と合する時は本源の自性が顯はれ大自覺大自我の我となるから宇宙全體が自己と悟らるゝ

妙觀察智 宇宙一體中の萬物なれば、一切の物々は相即て居る、又萬物は相互に融合し交渉して相入り合ふ作用を持って居る一が一切に入る 例へば一月天に在て影萬水に浮む如く一切が一に入る天上無數の星宿は眺むる人の瞳中に入る萬物が相互に體に於て相即て用にて相入して碍なきは妙智の用である如來と衆生と感應し無盡々々の法界を凡夫一念中に相入する佛心と凡夫心と交渉し入我々入の妙用より衆生の知見を開き佛界に悟入せしむるは斯妙智である

成所作智、客觀には色聲香味觸の相と現し主觀には視聽嗅味觸の感覺作用となるのが本斯智の用であるが吾人は自然界の粗末な相を見開して居るが若し如來心と合し佛眼開く時は如來作智の妙用たる如來に妙色相好の身また五妙境界の清淨土の莊

嚴其見る色聞く聲として微妙美感ならざるはなし、而して一切處でも悉く清淨國土と感ぜざるはなし

四智は若し要を取て云はゞ凡夫の感覺より諸佛賢聖の智慧に至る迄悉く如來四大智慧が各自の心とまた客觀との相とに現はれしのであるまた宇宙に此智慧の相が周遍して居つて人の心に現はるゝと云ふにあり

無礙光 用大

如來無礙の光明は、神聖正義恩寵の、靈徳不思議の力にて、衆生を解脱し自由とす

斯光は如來の用大にて太陽の光熱化の力を以て萬物に及ぼす如く如來は神聖正義恩寵の徳光を以て世界と人類との聖意に叶はぬ惡質を脱けて靈き世界と人類とに爲さる靈力である

無礙とは大靈の聖意が妨げなく行はれて靈き世界を建設する義、其反對に聖意の妨げを作す物は惡魔なので、大靈の光を礙て闇黒に人類を墮落させるのである

本來無礙の大道は天命として天地萬物の秩序としまた天恵として四時行はれ百物發生されて居る、心靈界には常に三徳の光明は照臨しあるも凡夫は愚にして分らぬ、故に惡魔の網に籠られて居る魔は徳光の缺たる處に生ずる怪物である人類は内に動物欲魔が伏し居り外に誘惑の魔が潛み内外から魔に襲はれて居るまた我慾の魔を誘ふに名譽權利財産等の姿を以て愚夫を惱まして居る、又人類には因果律に約束せられ動物より因襲し來たる性質等の種々の眞理に叶はぬ礙物を持って居る之を解脱して神聖なる聖意の行なはる世界と人類とになさるのは斯光である

大靈の光明を知ず惡魔の闇に迷ふ世の爲に大靈は佛陀を世界に出し無礙光中に生活すべき眞理を教なされた佛陀は正覺を爲すに先だち内外の惡魔を降伏し無礙の靈徳を得て衆生を魔網の中より救ひ出す道を開きなされた、大靈と子たる人類との親子間

の礙物を除き無礙光に入る時は如來の三徳は人類を指導するの光である

三徳は神聖正義恩寵とにて初に神聖とは道德秩序の原則にて一切の意志行爲を照鑑し玉ふ如來の智慧である神聖は眞理の源にて世に眞理は侵せぬと云ふは大靈の神聖から出て居るからである、道德律も大靈の神聖を標準として立つ、佛陀が諸惡莫作衆善奉行自淨其意是諸佛敎と宣て道德の律も自ら其意を神聖するを本とあると示された、佛敎で法性に隨順すと云ふも矢張り同じことである、神聖が大靈の聖意の道德秩序の源であるから斯光に向て進めば必ず佛と成り得るのである

正義は大靈が一切の非惡を排け正善を撰みて聖許に近づける勢力にて邪惡は斯光の缺たる處に發る現象なので眞の目的はない正善は聖意に叶ふ行爲なれば益々發達して眞善美の終局に接近す見よ天體の星雲が正常に努力したるは完全して太陽と成り然らぬは會散して了う地上の生物も正常に進化したるは人類と成り人類も正常に向上したるは撰まれて終局の大靈に歸一す、大靈は相を捨て妙を取り穢を去り淨を撰みて淨土を建て邪を排け正を攝め惡を遠ざけ善を近づけて佛界を立つ捨惡選善の法を以て本願力と云ふのである、公明正大なる聖意を體し私欲染汚の己に克ち最後の勝利を期するは宗教の目的である

恩寵は大靈が萬有の親とし一切を愛育し終局親子の合一を目的とする聖意である無縁の恩寵は普ねく十方界を照し之に接觸する物は心が清められ感情は美化せられ平和と妙樂を感じ知見を開き意志は靈化せらるゝ等は恩寵に預かりたる相にて大靈の恩寵を世に示す爲に慈悲の權化たる佛陀が出現なされたので生涯の教化は唯如來の恩寵に接せしむるを宗とした今世に慈悲の敎として闇夜の燈光となり苦海を渡る船として人類を助けつゝあるは恩寵が世界に現じたのである

無礙光はすべての解脱すべきことを除き聖意の實現せる世界と人類とに爲す妙用である

無對光

絕對無限の光明に、攝化せられし人は皆、諸佛と等しき覺位を得、大般涅槃に證入す

宗教の最終目的は大靈に攝取られ同化せられて諸佛と同じく無上正覺を得て永恒不滅の涅槃を證するにあり、本來如來と衆生とは親子不可離の關係を以て居るも絕對より發現したる現在の位置から見れば正反對と爲て居る、何となれば如來は絕對無限眞善微妙にて、衆生は相待有限虛偽罪惡である、然るに若し大靈の目的に順がひ、如來に攝化せられたる終局は衆生も有限より無限に生死は涅槃と轉し如來の心靈的無量光と合し諸佛と正覺を同ふし無量壽に歸して永恒の大涅槃を得るに至る、我教祖釋尊六年修道の結果、罪惡の源を脱し無明の闇晴れ正しく大眞理を覺り無限の心光徧ねく十方を照す之を正覺と云ひ衆生死の域を超て常住の安樂を得無量壽の永恒大生命となる之を大涅槃と爲、然る時は身は自然の掟に約束せらるれど神は涅槃常樂を享く、之を有餘涅槃とす、彌命終りて眞實無爲の常樂に入ること無餘涅槃とす

涅槃とは生死解脱し永恒常樂の都唯光榮と靈福との光輝く處、然るに涅槃界に種々の異名あり、大智慧の光永しへに輝く處の故に常寂光土と曰ひ、また一切妄想分別を離れたる自性天真の靈態なれば自性清淨涅槃界とも名づけ甚秘の靈界秘密の莊嚴大我の大日尊無量相好光明を照らし金剛薩摩の爲に法樂を受けしむ一切處に偏在するも凡夫が見聞する能はざる故に密嚴淨土とも云ふ又重々無盡の性徳一塵一切刹を容れ諸佛の境界不可説の故に蓮華藏世界とも名づく或は淨土とも又は極樂とも異名甚だ多いことは或は感覺的に意志的に智力的に又は譬喩的に同一の靈界を諸方面より名づけたるに外ならぬ

一切諸佛は内面は常恒に涅槃界に在て一方には不斷に分身應化して衆生を救度ひ玉ふ故に無住涅槃と爲

大乘佛敎の終局目的は一切人類をして正覺の無量光と合一し一切の眞理を照して遺りなく涅槃の無量壽に歸して永遠不滅に佛事をなすにあり

炎王光

衆生無始の無明より、惑と業苦の極なきも、大炎王の光にて、一切の障除こりぬ

人類には何人にも脱却かねばならぬ心垢を持って居る斯光は其れを除く勢力を火炎にて汚物を燒盡すに喩たのである

衆生無始の無明とは衆生端なき過去より間に迷ふて居ると云ふこと、又人間には動物の先祖から持て來たる肉欲がある、又進んで自分勝手の我欲がある、肉欲とは肉の快樂を貪る欲なので又貪欲腹患愚痴を本として、怨恨惱嫉憎憍慳誑等の煩惱がある又は性癖習慣性の偷盜奸淫放火等の惡弊病ありまた煩悶憂惱恐怖等の苦惱の病的ありそれらは遺傳にまた自己の習慣等に起因するものである

自己の弱點を自覺するは信仰に入るの動機なり己が罪業の深きを認め自ら脱却する勇氣のなきを悶え如來の大なる恩寵を仰ぎ敢て飽までに解脱を求むる時は早晚必ず成功すべし、いかに罪障深きも至誠懺悔の心深ければ必ず靈火の光明を得らる、喩は薪木を積むこと多ければ火も又熾然なるが如し、如來靈火を得るときは必ず罪業の薪は燒けることをえん、昔曾て煩惱として悪用したる貪瞋も、若し炎王光に依て靈化する時は、煩惱を融ひし道徳と成らしむ、吾人は須らく大炎王の光を仰ぎて、自己の三障を燒盡さんと望む

光化の心相

此下四光人は人の感覺と感情と知力と意志との四面を融合靈化する作用なることを明す

清淨光

如來清淨光明に、我らが汚も滌がれて、六根常に清らけく、姿色も自づと潤ふなれ

斯光は人の感覺の垢を滌ぎ而して清く美しくする妙用である感覺とは眼に視耳に聴き鼻に嗅ぎ舌に味はひ身に觸るゝ感覺作用にて凡夫の心は外界の美色美味等の欲の爲めには衛生や道徳をも顧みずして之が奴隸と成り又墮落の淵に沈む輩が少なくない此五欲は益々昂進む時は動もすれば病的に陥り易い、古來世に豪傑と云はるゝ人も、蛾眉粉黛の色に捕はれ酒煙の奴隸に没る族が多い、然して此五欲は人の心を汚染もの故に五塵と云又人の徳義心を賊なふ過失ある故に五賊とも云ふて居る、斯光は人の五塵に汚されまた病的に陥ることの弊害を自覺させ而して之を滌ぎ清めしむるは消極の方にて積極的に清淨化する時は自己の靈性八面玲瓏として身心皎潔なるを感じ、又美化したる感心は天地新らしく靈日麗しきを覺え恰も赫々たる日光が寶行に映する如く、また靈花心開き妙香馥郁として靈感極りなく天樂和雅の音を揚げて心耳の快感を覺ゆ八功甘露の水は舌根を潤すこと津々、ア、快哉怡哉喩は青眼鏡を以て見る時萬物皆な青色を呈すが如く清淨光化したる心眼を用ひば處として清淨靈界ならざるなし是らは斯光に依て美化したる感心の心相を明したりき

歡喜光

如來歡喜の光明は、我らが苦惱を安らぎて、禪悅法喜微妙なる

喜樂極なく感ずなれ

斯光に遇ふ者は一方には感情の憂惱恐怖の苦を安らげ積極には平和と歡喜とを感じらる、全體人間の天性は其心が顛倒して居るから憂悲や苦惱を感じる度強い何となれば、人生は肉の快樂を受くべき舞臺と思ひ唯物質の幸福のみを怖求めて居る還て夫

が不満と憂苦を感じる本因となるまた我慾の強き爲め名譽や財産等を飽までに怖求りそれが不足と煩悶の種となる此世界は凭る人々の欲望を満足させる爲に出来て居る故に強て物質に満足を求むる心を止め精神的に眞實の靈福を得んと欲せば還て人生の満足が得らるゝのである、そこで宗教心を發し如來の恩寵を仰ぐことになる然して微かにも靈光に接するならば從來の己が情操の甚だ非なることが感じられ實に己は思はずの罪人であると想はるゝ罪惡觀が昂まるに隨つて如來を信賴む念も彌強くなる何にしても大光明を得にあらざれば解脱得難しと信する時は其目的の爲には肉の快樂を犠牲にすることも厭はざるに至る、感情に如來を欽慕するの情が進むに隨つて信念内に煖を發す、己が罪惡は脱し難く靈光は捕獲し易からず己が弱きを感じて如來の恩寵を仰ぐこと益深く内に靈性煥たかに大靈の和氣春の如くに覆ふ己が全幅を獻げて大我に投歸する時神秘融合不可思議を感じ心の花は綻び爛漫として麗はしく馥郁として芳ばしく心機一轉して見ればこゝもまた如來光明中たとひ身は八苦充滿の娑婆に在るも神は歡喜光裡に住す然して心を静め慮を止めて如來と融合する時は神は常住安樂の園に遊ぶ如來の法樂を我樂とするは禪悅である一たび開きて永しへに咲匂ひける心の花を如來と共に眺めつゝ生活するは法喜と云ふ、極樂と云ふは歡喜光の生活にてある吾人は此肉體ある内は理想の樂園に逍遙し而して後には實在の淨土となるのである

智慧光

如來智慧の光明に、我らが無明を覺醒し、佛知見を開きては、

如來の眞理を示されむ

日光は照しあれ共盲者は見ることが能きぬ、如來の光明の中に在り乍ら知見することのできぬのが吾らの無明である、動物のやうに闇夜さへ見ゆる天性の眼を有るも又人間の理窟は能く判る理に有る靈性開かざれば靈界の消息は能く知見することでき

世には己が聖き眼の盲なるを覺らず如來や淨土は無いと主張する族がある實に憐れむべき徒である

佛知見を開きて真理を示さるとは基督教に效ゆる默示即ち聖靈を感じたること禪家に見性と云ふも同じことである

法華に釋迦出世の本懐は人々本具る佛知見を開き佛の正道に入らしむる爲なりと、靈界の眞理は文字計りの學者には實驗は不可能、されば天台大師は法華三昧に入て靈山に於て釋尊が衆衆の爲に説法する靈相を感じて爾から總持をえて智辨自在に成りしと又唐の善導大師は念佛三昧に入て彌陀の相好光明を觀し常に如來の指示を受けしと、當時懷感禪師あり學德一世に冠たり初め善導の勸めに於て大に疑惑を懷きしかど後善導の教に依り三昧功成て佛及淨土の相を感じて疑問氷解て群疑論を著された、知見を得るに二面あり形式と内容とにて形式とは禪家の見性のやうに先天自己の最根底なる自性を發見するので而すると横に十方堅に三際を徹通す、絶對の自性が顯現れることに成る之を形式と云ふ内容とは例へば自然界に太陽が在りて其光と熱の中に照らされ居る如くに心靈界の大日輪の如來眞金色にして圓光徹照して端正無比なるを想ふと始には想像であつたのが竟には靈感深刻にして想見を超えるに至る其如來の慈悲の聖容に對して暖温なる靈氣無限の法悦を感じこれに靈的生命の聖靈となりて活ける信仰とはならむ

不斷光

常恒不斷の光明に、我らが意志も靈化せば、作佛度生の願をもて、聖意現はす身とはなる

人の精神中感情が血肉とすれば意志は筋骨であるまた精神生活の本として奥に感情の我が温かな血や肉で活ては居るもの、筋骨の力で我意を張て力みて居らねば生存の競争はできぬ感情が我といふもの、一層固まつた人格の核と成るのは意志である意志

は働く生命である而て人間も動物なれば動物性の我が活んとする氣を根本として居る然して人の善と惡と二つに分るゝも意志の向方の何れかにあるので肉慾や我慾を目的として他人の迷惑を顧みざる如きは惡なので佛教に人の意向を十界に分類して迷悟善惡を區別して居る

人の意思の水は涓々として不斷に持續して我の希望する方に向つて働いて居るそこで長く結て習慣がついて地獄とも餓鬼とも人間とも菩薩とも馴化するのである、善惡に拘はらず凡夫の意思は肉慾我慾に使役はることは免れぬ然して超然たる靈界の光明が電光の如くに精神に感ず時始めて自己を顧み自我の自分勝手罪惡の巢窟を發見し自ら光明の煥發を仰ぐ自ら罪惡の囚を脱して聖き我と更らんことを求む即ち是宗教心である從來の罪惡我より脱して光明の生活に入るには不斷の信念を要す教祖釋尊我胸中の煩惱魔を降伏し靈き我と成て生涯五十年の靈的行爲は其模範を吾等に示された我らは如來を仰ぐ子なれば親の全き如くに全からんとを意志の願望とす之を願作佛心なのであるが此には常に如來を離れては子は成人できぬ聖意を己が意として不斷に向上的に努めねばならぬ肉と靈とは不斷の健闘不斷の改革日に新にして又日に新に往勵勇進で不斷に努力し持續して止まねば靈的電力は益熾んに發る若し光明失ふ時は闇闇となる

如來と共に發動してゐる靈的信念の電燈は之を以て他人に感傳すべし是を願度衆生心と云ふ他人に對して信念の電力を注ぐば相互の中に電力は彌盛なるを覺えん此身は如來の一枝葉に外ならず身の行爲を以て如來の光榮を現すのである

行儀分

信仰に依て光明を得たる心の相は已に明しぬ此より初發心より信念増進し光明を獲得し全く光明の生活に至る迄の道程を説かん此れに三階あり一喚起位、二開發位、三體現位

難思光 喚起の位

甚深難思の光明を、至心不斷に念ずれば、信心喚起の時到り、心の嘩嘩とは成ぬべし

初に難思光とは初心の輩には如來の光明と云ふも未經験のことなればいかゞに感すべき物かは識量ことができぬ故に難思と云ふ

先づ信心を喚起する次第は凭である、喻ば良田が雜草の爲に荒蕪れるも之を開墾して良種を播く時は好果を獲べき如くに、人に本具の靈性あり我儘の煩惱に覆はるゝも業障懺悔に心地を墾し、如來光明の聖種を素因とし、師友知識の保護を受け、殊に自から至心不斷に信念を運び堅く執持して止まざる時は信心の萌發せんこと何を疑ふべきぞ

如來光明の眞理を聞き能く會得すれば其客體なる如來を憶懷念して飽までも光明に接せんと熱望が發る、然れ共中々に光明を得ることは容易でない爰に於て己が業障の深重なるを自覺す志の深き者は、彌信念の熱度を増、信心の喚起に自修と傳燈とあり自修とは自ら念佛三昧又は靈光三昧を以て刻苦推勵して光明の煥發を期す、例へば木と木と摩擦して火を出す如くにす、傳燈とは全く靈活せる師友知識の親切なる相續に心力感傳して靈火を傳ふること甲の焚火を乙の薪木に傳ふが如くす然ば縦ひ業障の濕氣も慈愛の火力に燥かされて信仰が傳燈らるゝ何にしても人生の一大事なれば至誠と熱心でなければならぬ

宗教の中心は神人合一に有れ其何にして之を可能となれば、大靈は宇宙全體なれ共、其中心を得ざればならぬ、小宇宙なる頭腦の中心と、大宇宙の中心との合一を主とす、大宇宙の中心無量光如來を自己の精神中心を以て一心不亂に專注專念して止まざるにあり、如來は心靈界の大日輪である之を精神の本尊とすべし、天に在ては無量光如來、地に現しては釋迦世尊一體の二面である、故に釋尊を通じて天に輝く光明

如來を憶念すべきである

聖善導は、如來眞金色にして圓光徹照して端正無比なること常に想ふて捨てるなど教へられた其慈悲の面影が目前に在すと想へば久しく純熟する時は靈に活ける信念は極りなき法悦と感じらる、又朝夕の讚美禮拜は心靈を養ふの糧である至心不斷に念じ信念内に増長し、恩寵の和氣に催され靈き心の種は萌發し信念の曙光とは成ぬべし

無稱光 開發の位

如來の慈光被むりて、七覺心の華開き、神秘の靈感妙にして、聖き心により更へる

已に信心喚起したるは人の心地に播きし心種から初めて萌發したる位にて是よりは恩寵を蒙りて信心の花が開發の位に進む微なる光に接して從來の己を反照する時は自分勝手の甚だしき白から慚恥に耐へぬ然して罪障懺悔の念が切に起り、改善せんとすれどもかたきに彌々己が弱きを信認らる、罪惡の我が聖きに更生ざれば浮む瀬がなきと想へば益慈悲の御親が戀しくなる如來と共に在りて離れざる身にならざれば眞の安心はできぬ、如來と不可離の關係は心の花開くによる、心の花は七覺の枝に咲き匂ふ、七覺とは信念の心作用である、一擇法二精進三喜四輕安五定六捨七念初に擇法覺支とは已に信心喚起して如來を念するは定まれり、恰ど曙光を得て太陽の方向を認めたる如くに然れ共何がせん業障の雲深くして親しく慈光に感觸することが能きぬ煩惱妄想雜起して親子の間を隔つ、切に如來を念じて擇んで專注する之を擇法と云ふ、二精進靈性は如來の子である然れ共魔の眷屬なる肉我が跋扈して靈的親子の合一を妨たぐ罪惡自覺し業障懺悔の苦悶を感じ刻已奮勵は鐵垢より純金を煉り出す、如來の心光彷彿として在るが如く亡が如く心念強ければ魔障隨て厚し種々の業相現映するも敢て意に介せず自誓て若し我れ心光に接せずんば死すとも動かすとも一心金剛の如くならば何ぞ成功せざらん例へば學業技藝等も熱誠に精練する時は成熟する如く又寶石

琢磨する時は日光反映する如く靈性精練すれば如來の日光反射すべし、三喜、三昧、彌深く心念益微に靈妙なる定中の喜樂を感ず、四輕安、久々に純熟するに隨つて融明にして不可思議身心共に亡して唯靜中の輕快安樂を覺ゆ、五定、身心あるを覺えず無我神氣清明にして片雲なく麗日天に赫々照すこと極りなし神祕の靈感到佛我に入り我佛に入りて八面玲瓏内容の歡喜言の及ばざる所即ち是心靈開發の心相である、六捨、とは任運無意に佛と離れざること初には靈境失なひ易し細心の注意を要す已に純熟久しければ無意識的に佛を離れず例へば薰香衣に染むれば衣亦香氣あるが如く佛心即自心自心即佛心念々悉く佛心と相應す之を捨と念との覺支とす是の如き靈感に従來の罪惡我を降伏して清き我と成り人の子が佛の子と生れ更りしを開發の位とす

超日月光 體現の位

智慧の日月の照す下、光の中に生活す身は、聖意を己れが心とし、三業四威儀に現さん

已に信心開發し更生し後は佛子である、如來と精神的に合一不可離の身と成りし、此よりは光明の生活新人として、一方には大靈日光の恩寵を被り、一面には聖意を現はす靈的活動を爲すにある、智慧の日月は靈界の太陽なので肉體が太陽の能力に依つて活ける如くに心は如來光明に依つて聖き生活を爲す常に如來の恩寵なる衣食住を受けて之を着之を食ひ大に力と成て之を身と口と意の行爲に依つて聖きを現すべきである、已に此に至れば身は昨日と變らねど神は淨土の人である大悲の懷に在て世の毀譽八風の爲に動かされぬ、自己心中の靈性の聲は如來よりの命令である、吾人は又如來の權化たる釋尊の模範に則りて行爲すべきである、佛陀は提婆が逆惡心を以て害を加へるも慈悲心を以て還て感れみ玉ひしと、世尊が生涯五十年間の奮闘に吾人は倣はされ

ばならぬ、又吾人は光明中の生活と云ふも肉のある限りは靈と煩惱との健闘は續りざるをえぬ、光明の生活には六度を以て向上すべく即ち同情と正義と耐忍と勤勉と靜慮と智慧とにて如來を親とし一切が同胞なれば何人にも同情せざるを得ぬ正見正思正語正義は正義である忍辱に就ては釋尊前世忍辱仙の古へに倣はん忍辱仙は迦利王の爲に罵詈のみか劍を以て手足を切れ彌頭を裁んと爲らる時に王の試験に依て己が忍力の成就するを知れりとして其恩に報ふべきを誓へり又勤勉は靈性を研く力繼ひ發揮したる心靈も活動し精進せざれば錆る慮あり故に光明中に力行すべきである靜慮は活動の爲に靈力を養ふにあり智慧は如來の神聖より命今を受けて一切の行爲を指導して至善に向はしむ光である、四儀とは行住坐臥に佛と共に在りて佛行を爲すにあり

辨榮聖者

大ミオヤの無盡の大悲に催され、此の土に輝き出で給ひし辨榮聖者は、安政六年二月二十日下總國鷺の谷の念佛者山崎嘉平氏の長男に生を受け給ふ。家に在りて農事に勵み學業を好むこと世の常ならず、十二歳の時彌陀三尊を空中に想見して憧憬の念に堪へず、竟に明治十二年二十一歳にして出家の素志を遂げ、近村東漸寺の碩學大康上人に師事し、毎夜熟睡三時間の外は雜用に學問に忙しく、貫くに念佛一行晝夜斷え間なく、或時は手の平に油を入れ之に浸したる燈心を燈し、或時は腕の上に線香や蠟燭を燈して佛前に供へ、以てその忍力佛道修行に堪へ得るやを試し給ふ。疾に一切經を讀了し、東京に遊學して圀山上人に就きて華嚴を修めし央ばには法界觀の三昧圓かに現前し、明治十五年筑波山に籠りて至心念佛の曉には見佛三昧了々と發得し給ふ。爾來一舉一動全く佛法に相應し、施、戒、忍、進、禪、慧、缺くることなく、大

康上人の意を繼いで五香に新寺創立を志し明治二十七年本堂落成に至るまでは、雨漏る廢家に夜も燈無ければ線香の火を頼りに聖畫を描き、嚴寒にも重ね着せず藁を積んで蒲團となし、超然として勇猛に稱名し給ふ。建立寄附も一人一厘の結縁として遠近を行脚中若し貧窮者に遇へば月日重ねて喜捨を積みし金米全部之に施して更に又一厘より勸進を始め給ふ。途を踏むに蟻は勿論若草までも懇ろに之を避け、大康上人の訃音に接しては即座に追恩別行に入つて不臥念佛一百日に及び給ふ。明治廿七八年印度に渡りて大聖釋尊の御蹟を巡拜し、歸朝しては東西に巡教し阿彌陀經圖繪を施し給ふこと廿五萬餘部、普く米粒名號を施してかりにも一聲稱名の縁を結び給ふこと實に無數、難化の有縁一人の爲にも數年方便して猶措かず、寺の禮遇を簡り態々下男室に夜を明して勸化の縁を求め、夜寒の町に貧者を訪れては當日供養をうけし下着を脱ぎ與へて如來の大悲を喜びあひ給ふ。日毎夜毎の傳道に疲れし色もなく忙中に僅の閑を得ては如來の尊像教化の御文に筆を運び、汗血のにじむ慈悲の筆が幾千枚、その奉謝の金は悉く會堂の創建となり學園の創立となり數萬の文書數十萬の禮拜儀の施本に充て給ふ。食卓の上浴室の中至る所皆説法の道場にて、一所不住の年中巡教極寒極熱一日の休養もなき間に宿所の縁に随つては古今の書籍近代科學に至るまで枚々として研め給ひ又畫、歌、音樂、五筆の書等諸技悉く利生の方便ならざるなし。靈應内に満ちて、念々不捨寢息まで自ら稱名する程なりし間にも説法に非れば讀書、讀書に非れば書き物、實に一寸の光陰も爲すこと無くして過し給ふことなく、集る淨財は悉く利他の用に供へて反古紙一枚をも節約してその裏に原稿を書き給ふ。一切の時一切の處、たゞこれ佛作佛行、寸隙なきその御行狀に接しては始め尊大に構へし人も皆恭敬して其の教に類かざるなく、諸宗は勿論耶蘇教の牧師に至るまで發心してその門に入る。首唱し給ふ光明主義の光り萬民に被る所、念佛三昧各地に盛行はれ入信の行者幾萬皆悉く値遇の御恩を感泣して盡未來際の願行に奮ひ立つ超えて大正九年吹雪に更くる北越の夜寒身に泌む勸化の旅に老いの御聲に盡きぬ如來

の御慈悲を傳へて最後の三昧會を木枯悲しき柏崎に導かれ給ひし十二月四日遷化し給ふ。
 仰ぎ惟れば内證甚だ深く外用亦廣大に全分度生の無我の力が無作の精進に顯れ給ふ辨榮聖者の御一生は、如來光明のさながらの反映に在せば、誰か大慈悲の靈應を仰がざらむ。誰か光明の攝化を信ぜざらむ。

大正十四年十一月廿五日印刷
 同 廿五日發行
 誌代年七冊一圓二十錢(郵稅共)
 年十二冊二圓(郵稅共)
 編輯兼 山崎 辨成
 發行人
 東京市小石川區荏荷谷町九八
 印刷人 小林 七太郎
 東京市小石川區水道橋二一四四
 發行所 ミオヤのひかり社
 振替東京六八五一番